『長崎国際大学論叢』 第10巻　2010年３月　107頁～118頁

大学女子バレーボールにおけるゲームの敗因に関する事例研究

箕　輪　憲　吾
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

要　旨

バレーボール指導の資料を得ることを目的として、2006年度のNK大学女子バレーボールチームの西日本大学選手権大会における準決勝戦の敗戦の要因について、試合までのチームづくりの過程に関して検討を行った。主な結果は以下の通りである。

１）コート環境の変化がチームのパフォーマンスに影響するような状況では、重要な試合に勝つことは難しいことが明らかになった。

２）大事な試合で勝つためには、自信を持って試合に臨むことが必要であり、そのためには、準備段階でどのように練習に取り組できたかが重要であるということが明らかになった。

３）選手に、敗戦した試合のビデオを見せた上でレポートを書かせることは、選手自身を客観的に見つめ直させるいい機会となり、その後のチームづくりに重要な役割を果たすことがある。

４）トーナメント戦のような短期決戦の大会において、チーム状態が苦しい中で勝ち上がっていくためには、チームの雰囲気を変えることのできる選手の存在が必要である。

５）指導者が「チーム力を維持する」という考え方を持つことが、たとえ短期間であっても「チーム力の低下」につながることがある。従って、指導者はどんな状態であっても「常に進歩する」という姿勢を持つことが、チームが勝ち続けるためには必要である。

キーワード

バレーボール、チームづくり、ゲームの敗因

Ⅰ．緒　言

プロ野球チームの東北楽天ゴールデンイーグルスの野村克也前監督が、よく好んで使う言葉に「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」がある。そして、それについて「ラッキーで勝利を拾うことはあるが、どんな敗戦にも必ず敗因がある。不運だけによる敗因はない。それを厳しく自己分析することが、次の勝利を導くための第一歩」（野村・2008）と述べている。これは、競技スポーツには必ず勝敗がついてくるが、その中で特に負けた試合について分析を行うことが、その後のチーム力を向上させ勝利を得るために非常に重要であることを示唆している。

これに関連して、児玉（2007）は「勝ったゲームよりも負けたゲームから学ぶことの方が圧倒的に多い」そして「負けてただ挫折するだけか。敗因を徹底的に分析して次の勝負に懸けるか。その違いはあまりに大きい。」と述べている。さらに森（1998）は、「勝って何も学べないよりも、負けて何事かを学ぶ方がはるかに意味がある。それが＜負けを知る＞ということだと思う。負けて運が悪かったですませては、何も学べない。なぜ負けたのか、次はどう戦うべきかを学べれば、負けにも立派な意味が生まれる。」と述べている。これらのことからも、負けた試合から学ぶ姿勢を持つことが、指導者や選手が成長しチーム力を向上させる上で重要であると

考えられる。

そこで問題となるのは，競技スポーツにおける敗戦にはどのようなものがあるかであろう。一般的にそれには、「完全な力の差による敗戦」、「負けはしたが打つべき手は全て尽くした上での敗戦」、「ケガなどの大きな原因によって力を発揮できなかった敗戦」といったものが存在し、その中で最も分析を必要とすべきものは、「何故あのような試合をしてしまったのか・・・」という敗戦であると考えられる。このような敗戦に対しては、チームが問題点を明確にした上で課題の解決に対して取り組まない限り、同じ失敗を繰り返すことは明らかである。

このような状況の中で、2006年度のNK大学女子バレーボールチームは、春季リーグ戦を全勝で優勝したが、その約１ヶ月後に行われた西日本大学選手権大会では、優勝候補と言われながら同じリーグ所属のチームに準決勝で敗れて３位に終わっている。その試合こそ「何故あのような試合をしてしまったのか・・・」という敗戦に当てはまると考えられる。そこで本研究では、その試合結果について、NK大学女子バレーボールチームのそれまでのチームづくりの過程および春季リーグ戦との比較等を行い、その敗因について検討を行うものである。

本研究の目的は、2006年度西日本大学バレーボール女子選手権大会におけるNK大学女子バレーボールチームの敗戦の要因について検討を加えることにより、今後のバレーボール指導の資料を得ることである。

II．研究方法

１．研究対象

本研究の対象は、NK大学女子バレーボールチーム（以下：NKチーム）の2006年度の西日本大学バレーボール女子選手権大会（以下：西日本インカレ）の試合とそれまでのチームづくりの過程であった。

NKチームは、創部７年目のチームであり、2003年度の秋季から九州大学１部リーグに所属している。2006年度の九州大学女子バレーボール１部リーグ戦は７戦全勝で優勝という結果であったが、西日本インカレでは優勝候補の本命と言われながら、準決勝戦で春季リーグ戦では３-０で勝っている同じ九州リーグ所属のKT大学チームに０-３で敗れて３位であった。部員は、４年生５名、３年生７名、２年生２名、１年生５名の計19名で、コーチングスタッフは基本的にはM監督のみであるが、大学外部の理学療法士１名がトレーナーとして月１回程度選手の身体のケアを行う、という指導体制あった。

２．方　法

本研究では、まずNKチームの2006年度のチームの目標、主な選手の特徴、春季リーグ戦までのチーム状況と試合結果について記述を行う。次に、西日本インカレまでのチーム状況と試合結果について記述を行い、その後西日本インカレの敗戦の要因についての検討を行う。

検討を行うにあたっては、春季リーグ戦と西日本インカレのNKチームとKT大学の対戦に関するデータの比較、大会後の選手のレポート、M監督のノート等を用いる。

試合に関するデータの比較は、春季リーグ戦と西日本インカレのNKチームとKT大学の対戦について、以下に示す項目に関して両チームのデータを集計して行った。データの収集は、コート後方から全体が入るようにVTRに撮影されたゲームを後日再生することによって行った。

①　サーブ得点率（サーブ得点数／サーブ打数＊100）

②　サーブレシーブ（以下：SR）返球率（コンビネーション攻撃が行えるSR返球数／全体のSR数＊100）

③　SRからのスパイク決定率（SRからのスパイク決定数／SRからのスパイク打数＊100）

④　ラリー中のスパイク決定率（ラリー中の

スパイク決定数／ラリー中のスパイク打数＊100）

⑤　ブロック得点率（ブロック得点数／セット数）

また、選手のレポートは、西日本インカレが終了した数日後に、準決勝のKT大学戦のビデオで見た上で「西日本インカレにおける個人・チームの問題点と今後の課題」について、スターティングメンバーの７名にのみ提出させたものである。

なお、本研究は大会終了後に企画されたものであり、研究の意図を持って練習、ゲーム、指導が行われたものではない。

Ⅲ．チームづくりの過程について

１．西日本大学選手権までのNKチームのチームづくりと試合結果について

まず、NKチームの2006年度の目標、主な選手の特徴、そして春季リーグ戦までのチーム状況と試合結果、さらに、西日本インカレまでのチーム状況と試合結果について記述を行う。

⑴　NKチームの2006年度の目標について

NKチームは、前年の2005年度の秋季１部リーグ戦で初優勝を狙いながら、最も大事な試合であったFU大学戦の公式練習中にレフトエースの選手が肩を脱臼したことが大きく影響してセットカウント２-３で敗れ、あと一歩のところで優勝を逃して２位であった。しかし、その後の全日本大学女子バレーボール選手権大会（以下：全日本インカレ）においては、２、３年生中心のチームで戦いチーム初のベスト４という結果を残しており、創部からの歴史は浅いが、確実に大学トップレベルの実力を持つようになっていた。M監督は、前年の全日本インカレのレギュラーメンバーは３年生が２名、２年生が５名であったことから、全てのメンバーが残留する2006年度はチームとして勝負の一年と考えていた。そして、2006年度の目標として、まずは春季リーグ戦優勝、そして西日本インカレ優勝、最終的には全日本インカレ２年連続ベスト４以上、と考えていた。また、これまでに九州リーグ所属のチームが全日本インカレで優勝したことがなかったことから「２年連続ベスト４以上」という目標の中に、極めて難しいと言えるが「優勝」の可能性ということもM監督は考えていた。

⑵　NKチームの主なメンバーの特徴

A選手（４年生、キャプテン、センター、179㎝）：高校ではそれほど目立った活躍はなかったが、大学では１年生の時からレギュラーとして活躍し、４年生の時には東アジア選手権の大学選抜日本代表に選出されている。口数は少ない方で主将に向いているタイプとは言えなかったが、他の４年生と能力的な比較を行った場合、チームにおける絶対的な存在としてキャプテンに指名されていた。

B選手（４年生、センター、177㎝）：全国大会常連の名門高校出身であるが、そのチームでは試合に出るどころか全くベンチ入りもしたこともない。大学入学後に徐々に力をつけ、前年の全日本インカレではレギュラーとしてベスト４入りに貢献している。

C選手（４年生、副キャプテン、レフトの控え、169㎝）：中学校の選抜で日本一になり、高校でも全国大会上位の成績を持つ選手。１、２年生の時はレギュラーであったが、その後レフトの控えとピンチサーバーとして活躍している。４年生の中では高校での実績・経験が突出しており、後輩にも厳しい姿勢を見せることのできるチームにとっては非常に重要な選手である。

D選手（４年生、レフトとライトの控え、168㎝）：高校３年生の時に県選抜チームのメンバーとして九州ブロック国体に出場している。ジャンプ力、パワーはあるが、守備に不安があり、その他のミスも多く、起用の仕方が非常に難しい選手である。

E選手（３年生、ライト、170㎝）：高校では全国大会に出場経験のあるチームの主将でセン

ターブレーヤーであった。逆足の踏み切りでスパイクを打つことから、大学入学後はライトプレーヤーへ転向し、１年生の秋季リーグ戦よりレギュラーとして定着した。NK チームにおける攻守の要の選手である。

F 選手（３年生、レフト、168㎝）：高校３年生の時に県の選抜チームのレギュラーメンバーとして国民体育大会に出場し、ベスト16の成績であった。身長は低いが、サーブに特徴がある技巧派のレフトアタッカーで、レシーブの中心選手でもある。

G 選手（３年生、セッター、160㎝）：高校２年生の国体でレギュラーとして３位になった実績を持つ選手。大学では２年生からレギュラーになったが、当初はトスの安定感を欠きそれが原因で敗れたゲームもあった。この選手の成長により、チーム成績が向上していった。

H 選手（３年生、リベロ、154㎝）：高校３年生の時にインターハイで優勝し最優秀リベロ賞を獲得している。レシーブ能力は非常に高いものを持っており大学２年生の秋季リーグ戦からレギュラーとして定着したが、口数の少ない選手で、リベロに重要と考えられる“指示力”が課題であった。

I 選手（３年生、レフト、170㎝）：高校では全国大会に出場経験のあるチームのセンタープレーヤーであった。大学入学後にレフトプレーヤーへ転向し、１年生の春季リーグよりレギュラーとして活躍、前年のチームの第一エースである。感情を表に出してプレーをできる選手であり、チームのムードメーカー的な存在でもあったが、全日本インカレ後に手術した右肩の回復が遅れたため、2006年度は選手として試合に出場することはできなかった。

J 選手（１年生、レフト、185㎝）：日本の高校を卒業した中国からの留学生。高校ではセンタープレーヤーであったが、大学入学時からレフトプレーヤーに転向し、春季リーグ戦から I 選手に代わりチームの第１エースとして活躍した。良くも悪くもこの選手の調子が、チームの結果を大きく左右することが多い。

K 選手（１年生、ライトの控え、170㎝）：高校３年生の時に国体で優勝した実績を持つ選手。チームで唯一の左利きで、ライトプレーヤーとして将来の活躍が期待される選手。

(3) 春季リーグ戦までのチーム状況と試合結果について

M 監督は、春季リーグ戦については、昨年の第１レフトの I 選手が全日本インカレ終了後に手術した右肩の回復が遅れたため出場が厳しい状況であったことから、図１のようなスターティングメンバー構想を考えていた。チームの最も大きな課題はその I 選手の穴をどう埋める

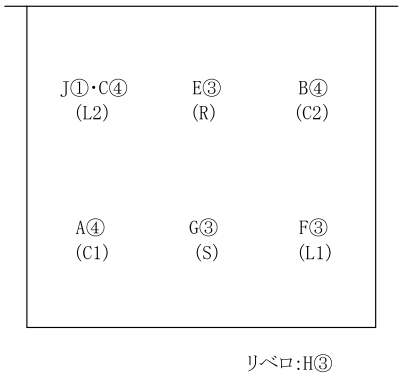

図１　2006年度当初のスターティングメンバーの構想

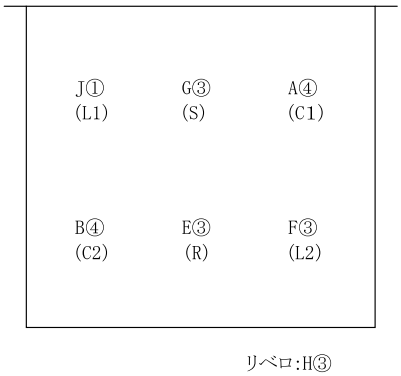

図２　2006年度の NK チームのスターティングメンバー

S：セッター　R：ライト　L１：第１レフト　L２：第２レフト　C１：第１センター　C２：第２センター
＊◯数字は学年
＊NKチームではセッターを挟むセンター(C１)とレフト(L１)の選手をそのポジションの中心選手として重視している.

かであったが、当初の構想は、第１レフトには昨年までの試合経験からＦ選手を、第２レフトには４年生でレギュラーの経験もあるＣ選手か新入生のＪ選手を起用するというものであった。しかし、練習、練習ゲームを行う過程の中で、思った以上に新入生のＪ選手がレフトエースに適していることが明らかになり、春季リーグ戦は図２のメンバーでスタートした。Ｆ選手については、基本的にサーブが得意で、守備の中心選手であったことから前年と同じポジションに落ち着いた。Ｍ監督は、Ｉ選手の出場は厳しいが昨年の全日本インカレのメンバーのうち６名が残っている状況に加えて、Ｊ選手の加入によって昨年以上のチーム力になったと考え、リーグ戦初優勝に対して十分な手ごたえを感じていた。選手も同様にリーグ戦に対しては自信を持っていたと言え、練習にも「絶対に優勝する」という雰囲気が感じられていた。

2006年度の春季リーグ戦のNKチームの試合結果は表１に示した。Ｍ監督は、リーグ戦前のチーム力から考えて、「初優勝は失セットゼロの完全優勝」ということも意識していたが、第１週の試合から実力的にレベルの差があると考えられるチームに対してセットを落としてのスタートとなってしまった。Ｍ監督は、レベル差があると考えられるチームにセットを落とした場合、これまでならば非常に厳しい指導を行っていたが、「初めて優勝するというのは簡単なことではない、苦労するのは当然である」といった趣旨のことを選手に言い、試合の結果よりも内容を重視し「優勝するためには何が必要なのか、今足りないものは何か」を考えるように指示をしていた。

そして、このリーグ戦初優勝へ向けての最大の危機は、第２週の１試合目のDY短大戦の第２セット、NKチームが23-16でリードしている場面に交代出場してきた相手チームの控え選手の足に乗ってしまったＥ選手が、足関節捻挫で退場してしまったことであった。Ｅ選手はNKチームの攻守の要の選手で、その時点でチーム内に代われる能力を持っている選手がいないという存在であった。第２セットは既に終盤であったことから、控えのＤ選手を起用し25-17で逃げ切ったが、そのままＤ選手を起用した第３セットは、序盤からリードされる展開となり、８-11でリードされた場面でＣ選手へ交代、その後は追いついては放される展開となり最終的に23-25で落としてしまった。このセットを失ったことは、チームにあったＤ選手のプレーに対する不安からSRやブロックにミスが出てしまったこと、また、ライト攻撃がほとんどなくなったことなど、攻守の要であるＥ選手不在が影響した結果であった。第４セットは、守備に不安のあるＤ選手ではなく、Ｃ選手をスタートで起用した。Ｃ選手は、レフトポジションではあるがレギュラーの経験もあり、チームメイトからの信頼度も高かったことから、この選手をスターティングメンバーで起用することでチーム全体に落ち着きを持たせる、という狙いがＭ監督にはあった。その結果、

表１　NKチームの試合結果－１

九州大学春季１部リーグ戦（2006年５月６日～29日）			
第１週	NK大学	3（25－13, 25－20, 25－15）0	SJ短大
	NK大学	3（23－25, 25－15, 25－14, 25－９）1	KK大学
第２週	NK大学	3（25－15, 25－15, 23－25, 25－16）1	DY短大
	NK大学	3（25－23, 25－19, 23－25, 25－18）1	SJ大学
第３週	NK大学	3（25－17, 28－26, 22－25, 25－19）1	FK大学
	NK大学	3（25－23, 25－21, 25－19）0	KT大学
	NK大学	3（25－13, 25－17, 25－20）0	FU大学
			最終成績　優勝（７戦全勝）

第４セットは中盤から一方的な展開となり、リーグ戦最大の危機となった試合をセットカウント３-１で勝利することができた。これは、初優勝に対する選手一人一人の気持ちと、これまでにもチームを支えてきたＣ選手の存在があったからこそできたことと考えられる。翌日の試合はＥ選手が出場できる状態ではなかったため、Ｍ監督はＣ選手か前日の試合はベンチ入りしていなかった新入生のＫ選手のどちらかで迷ったが、最終的にＣ選手をスターティングメンバーとして起用し、セットカウント３-１で勝利した。

そして、最終週は優勝へのプレッシャーがかかるかと思われたが、Ｅ選手がケガから復帰したこともあってチームのムードも上がっており、FK 大学戦、KT 大学戦に連勝して、最終戦の FU 大戦を待たずに、NK チームは初優勝を達成した。

⑷　西日本インカレまでのチーム状況と試合結果について

西日本インカレ前の NK チームは、キャプテンのＡ選手が大学選抜の合宿、４年生の３名が教育実習でチームを離れ、４年生はマネージャー（選手兼任）のみが練習に参加しているという状態が多かった。これについてＭ監督は、教育実習等で選手が不在ということと春季リーグ終了後から西日本インカレまでの期間は約１ヶ月と短いことを考え合わせても、主力である３年生を中心にチーム力を維持することで「西日本インカレも優勝できる」と考えていた。そして、2006年度の最終目標の全日本インカレ２年連続ベスト４ということ考えた場合、リーグ戦優勝後の西日本インカレ前はチームが大きく成長できる大事な時期であったが、それに関しては選手の自主性ということを期待していた。

しかし、１年生エースのＪ選手が怪我をして思うような練習が出来なかったこと、そして、I 選手の練習のペースが上がらずに復帰がさらに遅れ、西日本インカレにも出場できる状態に戻らなかったことはチームにとって西日本インカレに向けた大きな誤算であった。Ｊ選手については新入生であったことから、将来のことを考えて無理をさせないという方針を選択したため、練習不足の状態で試合を迎えることとなってしまった。

以上のような状況で迎えた西日本インカレは、前年度のベスト４のチームが翌年の大会の第１～第４シードになるというルールがあったため、2006年度の NK チームは第４シードとして大会に臨んだ。西日本インカレの結果を示したものは表２であるが、過去10年間の大会のうち９回を九州リーグ所属のチームが優勝していたことから、春季九州１部リーグで優勝した NK チームは今大会の優勝候補の本命と考えられていた。

Ｍ監督は、「自分たちの力を発揮することが優勝へ向けて非常に重要である」と考えて大会を迎えたが、予選グループ戦の KS 大学戦はセットカウント２-１で勝ったものの内容的には最低と言えるものであり、全く自分たちの力

表２　NK チームの試合結果－２

西日本大学選手権（2006年６月22日～25日）			
予選グループ戦	NK 大学	2（23－25，25－17，25－22）1	KS 大学
		※予選グループ戦のみ３セットマッチ	
２回戦	NK 大学	3（25－21，25－18，25－19）0	SK 大学
３回戦	NK 大学	3（25－16，25－20，25－17）0	KR 短大
準々決勝	NK 大学	3（25－15，26－24，16－25，23－25，15－11）2	KS 大学
準決勝	NK 大学	0（17－25，19－25，17－25）3	KT 大学
		最終順位　３位	

を発揮できない試合であった。KS 大学は、春季関西大学１部リーグ戦５位ではあるが高校時代の経験や能力の高い選手がいるチームで、優勝候補チーム相手に思い切った試合を行ってきたと言えるが、それに対して NK チームは完全に受け身の状況であった。NK チームは、「優勝」というプレッシャーがかかったからなのか、思うようなプレーが全くできずに「一体どうしたのか」という雰囲気の試合であり、チーム全体としての緊張感も感じられなかった。

M 監督は、この試合の結果とグループ戦終了後に行われたトーナメント戦の抽選結果が厳しい組み合わせとなったことから、その夜にチームの主力である３年生の４選手へメールを送っている。その主な内容は、「チームのいいところが全く出せていないが、受け身になるよりも、まず自分たちらしいバレーをするしかない。＜負けたらいけない＞という気持ちよりも、まだ西日本インカレは優勝したことがないのだから、＜勝ちに行く＞という気持ちでやろう。」といったものであった。

次の日の２回戦は、前日のメールの効果も多少はあったのか「気持ちの切り換え」ということがプレーにも見られた試合で SK 大学に３-０で勝利し、選手の表情や雰囲気からも徐々にチームのペースが上がっていくものと感じられた。しかし、大会３日目の準々決勝戦で再度の対戦となった KS 大学戦では、NK チームが２セット先取した後にファイナルセットまで持ち込まれ、結果としては３-２で勝ちはしたがその内容は予選グループ戦と同様なものであった。

そして、大会最終日の準決勝 KT 大学戦は、第１セットの前半こそリードしたものの、その後は常に KT 大学のペースで試合が進み、セットカウント０-３で敗れ、内容的には完敗であった。NK チームの西日本インカレは、結果的にチームが本来持っている実力を発揮できた場面はほとんどなく、「なぜこのような試合をしてしまったのか」ということしか残らないような大会となってしまった。

２．西日本大学選手権の敗因について

ここまでに、NK チームの西日本インカレまでのチームづくりの状況と試合結果について記述を行ってきたが、ここでは、西日本インカレの準決勝戦の敗戦の要因についての検討を行う。

(1) データの比較からみた敗因について

春季リーグ戦と西日本インカレの「NK チー

表３　NK チームと KT 大学の技術成績

		春季リーグ			西日本インカレ		
		打数	得点	得点率	打数	得点	得点率
サーブ	NK	74	3	4.05	55	0	0
	KT	64	1	1.56	73	9	12.33
		SR 数	返球数	返球率	SR 数	返球数	返球率
SR	NK	55	42	76.36	68	37	54.41
	KT	66	38	57.58	52	37	71.15
		打数	決定数	決定率	打数	決定数	決定率
SR からのスパイク	NK	50	25	50.00	50	14	28.00
	KT	55	19	34.55	52	20	38.46
ラリー中のスパイク	NK	62	21	33.87	70	16	22.86
	KT	63	19	30.16	95	30	31.58
		得点数	セット数	得点率	得点数	セット数	得点率
ブロック	NK	8	3	2.67	10	3	3.33
	KT	4	3	1.33	4	3	1.33

ム対 KT 大学」の試合の両チームのデータを示したものが表３である。NK チームの西日本インカレの結果は、春季リーグ戦と比較してブロックを除く全ての項目に関する数値が低下しており、逆に KT 大学はブロックを除く全ての項目の数値が上昇していた。これらのデータから見れば、春季リーグ戦と西日本インカレで両チームの勝敗が逆転したのは当然のことと考えられる。

その中で、サーブと SR については、KT 大学のサーブポイント数が増加した上に NK チームの SR 返球率が21.95%も低下していた。また、NK チームはスパイク決定率に関しても、SR からのスパイクが22.00%、ラリー中のスパイクが11.01%それぞれ低下していた。

NK チームの SR の結果については、コート環境の変化が影響していたことが考えられる。NK チームは、第４シードチームでありながら決勝トーナメントの準々決勝戦まで全てサブアリーナで試合を行い、敗戦した準決勝戦からメインアリーナで試合を行うという組み合わせであった。大会会場のサブアリーナはメインアリーナと比較して、極端に天井も低く、アリーナも狭い。それが、準決勝戦では天井が高く、広さの全く異なるメインアリーナへ変わったこと、そして KT 大学は１回戦から全てメインアリーナの同じコートでの試合であったことが、NK チームの SR の結果およびその後のスパイクの結果にも大きく影響したと言え、これが西日本インカレにおける敗因の一つになったと考えられる。江川（1989）は、ゲームの勝敗を左右する外部条件の一つとして、試合会場の状況（コートの広さ）を上げている。今回もそういったことが NK チームのパフォーマンスに影響を与え、西日本インカレの敗因の一つと考えることはできる。しかし、コート環境が変わることはトーナメント戦の抽選結果からわかっていたことであり、試合に勝っていればそのようなことが問題になることはあり得ない。従って、競技スポーツにおける敗戦という結果から考えれば、コート環境の変化によるパフォーマンスへの悪影響は負けたことに対する言い訳にしかならない。むしろ、そういったことにより重要な試合におけるパフォーマンスが左右されること自体が問題であると言え、そのような状態では勝つことは難しいのは明らかである。

⑵ 選手のレポートについて

まず、大会後に選手が提出したレポートには、全ての選手が西日本インカレに対して「不安があった」、「自信がなかった」と記述しており、その原因としては、多くの選手が「西日本インカレまでの練習にある」としていた。これに関して B 選手は、「力はあると言われているが、その力を出せる練習をしてきたかと言われれば不十分だった」、また H 選手は「練習してきたことに自信が持てなかった」と記述していた。前述のように、M 監督は西日本インカレ前の時期のチームの成長に対しては選手の自主性に期待していた。しかし、多くの４年生が不在の上にケガ人が出た状態では、自主性に任されたとしてもチームが満足な練習などできるはずもなく、それが試合に対する選手の不安を徐々に大きくしていったと考えられる。また、４年生の不在がチーム練習の不足につながり、全ての選手の不安材料であったと考えられる。このように、西日本インカレにおいては NK チームの全てのメンバーが不安を抱え、自信のない状態で試合に臨んでいたことから、準決勝での敗戦はある面、当然の結果であったと言えよう。

NK チームは、前年度の秋季リーグ戦では「優勝できる」という確信を持ちながら、最重要と考えられた FU 大学戦の前に、第１エースの I 選手が癖になっていた右肩を脱臼し、それがチームに大きく影響して初優勝を逃していた。そして、その悔しさを忘れずに練習を行ったことをその後の大きな自信として、約１ヶ月後の全日本インカレでは秋季リーグで負けた第２シードの FU 大学を破った上で、チーム初のベ

スト４という結果を残している。同様に、レポートの中でＦ選手は、「リーグ前の関東遠征で全く歯が立たない状況に対する悔しさをバネに練習し、春季リーグは“自信を持って”臨むことができた」、またＥ選手は、「リーグ戦の時は、練習で気持ちを上げて、勢いをつけて試合に臨んでいた」と記述しており、春季リーグの試合に対して選手は自信を持ってコートに立っていたと考えられる。そして、それがチームの攻守の要であるＥ選手のケガを乗り越えての九州１部リーグ戦初優勝につながったと言える。

白石（2005）は、「自信とは、＜よい結果が出てから、後で持つもの＞ではなくて、＜よい結果を出すために、あらかじめ持って事に臨むもの＞」と述べている。これらのことから、大事な試合で勝つためには、自信を持って試合に臨むことが必要であり、そのためには、準備の段階で「練習に対してどのように取り組できたか」が重要であることが明らかになった。

また、選手のレポートには「チームがバラバラであった」、「チームとして戦えていなかった」といった記述も多く見られた。データ収集の際にビデオで確認したNKチームの印象は、得点シーンの喜び方やチームの盛り上がり方も春季リーグ戦と比較すると全く異なり、どこか淡々としていて勝てるチームの雰囲気は全く感じられなかった。

辻（2000）は、「全員で頑張って一つの勝利、全員で努力をして一つの結果が得られるのです。つまりチームの目標は、全員に共通したものであると同時に、一人ひとりのものになってはじめて達成されるのだということを忘れてはいけません」と述べている。これに対してNKチームは、教育実習や選抜チームの合宿に行っていた選手も「早く自分のプレーを戻したい」という気持ちはわかるが、自分のプレーのことしか頭になく、チーム全体のことを考えてなかったと思われる。これらのことから、NKチームは、西日本インカレでは春季リーグ戦の時のように「絶対優勝する」という一つの目標、方向に全員が向かってなかったと考えられ、これが優勝できる実力がありながら敗戦した要因の一つであると言えよう。重要な試合に対してチームがまとまりのない状態で臨んでしまえば、結果は見えている。G選手は「本当に優勝するためにやってきたのか」と記述していたが、この言葉が敗因の多くを表しているのかもしれない。

その他にもレポートには様々なことが書かれていたが、それは、指導者がチームや選手の状態を把握し、その後のチームづくりを考える上で重要な資料となるものであった。また、その後の練習の雰囲気等から、選手自身にとっても今後どうするべきかについて考えるよい機会になっていたようであった。これらのことから、選手に敗戦後にゲームのビデオを見せるだけでなく、その上でレポートを書かせることによって客観的に自分自身を見つめ直させることが、その後の選手の成長およびチームづくりに重要な役割を果たすことがある、ということが認識された。

(3) チーム状況から考えた敗因について

NKチームの敗因の一つに、春季リーグ戦から西日本インカレに向けてレギュラーメンバーに代わる選手の台頭等による，チーム全体のレベルアップが見られなかったことが考えられる。

その中で、I選手が西日本インカレに出場できなかったことは、チームへ大きな影響を与えたと言える。I選手は、前年の全日本インカレの第１レフトでチームのムードメーカーでもあり、苦しいチームを救うことのできる選手の一人である。NKチームは春季リーグ戦において、E選手が足関節捻挫で退場した非常に苦しい場面では、C選手の活躍がチームを救い勝利へと導いていた。しかし、西日本インカレでは、グループ戦から苦しい状態が続いていても、その流れを変えられる選手がレギュラーにも控えにもいなかった。西日本インカレに入ってチー

ムの苦しい状態が続いたこと、J 選手が大会前のケガで満足な練習を行えなかったことを考え合わせると、やはり、I 選手が試合に出場できる状態に戻らなかったことはチームに対する影響が非常に大きかったと言えよう。当然、勝っているときにメンバーを代えるなど先にチームが動くという必要性は低いと言えるが、リーグ戦と違って短期決戦となる西日本インカレのようなトーナメント大会においてチーム状態が苦しい中で勝ち上がって行くためには、チームの雰囲気を変えられる選手の存在が必要であると言えよう。

同時に、教育実習で４年生が不在という状況に、下級生が「自分たちがチームを引っ張って西日本インカレでは勝つ」あるいは「頑張ってレギュラーメンバーを取る」という姿勢が足りなかったことも事実である。チームが勝った時こそ、さらに全体のレベルアップが必要であり、それが続けて勝つためには重要であると考えられる。

一方では、推測の範囲を出ないが、KT 大学のチームは、春季リーグ戦では２名のセッターをどちらかに固定できずに不安定な状態で試合を行っていた。しかし、西日本インカレ前は、４年生のセッターが教育実習で不在だったことにより、２年生のセッターで固定せざるを得ない状態であったことで、逆にそのセッターを中心に下級生がまとまるという結果になっていた。さらに、春季リーグ戦ではケガのためピンチサーバーに回っていた４年生をライトに固定し、守備力を向上させたことでチームの安定感も上がっていた。そして、KT 大学は各学連の上位チームとの２回戦、準々決勝、決勝戦は全ての試合がフルセットでの勝利であり非常に苦労をしていたが、春季リーグ戦で敗れており今大会の優勝候補と言われていた NK チームとの試合は、全てを賭けて勝負してきた感じであった。これに対して、NK チームの西日本インカレにおけるチーム状態では、それを跳ね返す力を発揮することが全くできなかった。これらのことから、大学のトップレベルのチーム同士の試合になれば、試合に臨む状態によってその結果が大きく左右されるため、やはり準備段階での練習が重要であるということが認識された。

⑷　指導者の指導姿勢について

M 監督は、西日本インカレを迎えるにあたって「チーム力の維持」が優勝へつながると考えていた。確かに、西日本インカレまでは春季リーグ戦後約１ヶ月という短い期間であり、また、教育実習や選手のケガなどもあったので、そういった考え方もあるかもしれない。しかし、前述したように、前年度の秋季リーグ戦の悔しい思いから NK チームが全日本インカレでベスト４入りしたことを考えれば、春季リーグ戦で優勝できずに悔しい思いをしたチームが、１ヶ月間という短期間で劇的な変化をする場合もある。そう考えるならば、指導者が「チーム力の維持」という考え方を持つことが、たとえ短期間であっても「チーム力の低下」へとつながってしまう可能性がある。従って、M 監督の西日本インカレに対する考え方が、敗戦の要因の一つになったと考えられる。チームが勝ち続けるためには、指導者が「どんな状況であっても常に進歩する」という姿勢を持って指導することが必要であると言えよう。

また、M 監督はこれまでは、大会を通して今回の西日本インカレのようなゲーム内容であれば、かなり厳しい指導や言葉かけを行っていたが、この大会に限っては大会前の練習同様に選手の自主性に期待し、やる気を出させることを最優先して指示を行っていた。確かに最終目標の全日本インカレを考えた場合、選手の自主性によるチームの成長は非常に重要である。しかし、前述のように大会前に４年生の不在が多かったことは確実にチーム影響しており、その状態で選手の自主性に期待し過ぎたことが、逆にチームに不安な状態を招いてしまったと言えよう。今回は J 選手のケガや I 選手が復帰できなったことも重なっていたが、M 監督は西日

本インカレ前に多くの４年生が不在であったことを考慮した上で方針を決定すべきであったと考えられる。これらのことも含めて、「最終目標は全日本インカレ」という考えはあったとしても、M 監督の姿勢は西日本インカレという１回限りの勝負に対しては中途半端であったと言え、それによってチームが不安な状態で大会を迎えてしまったことが、敗戦の要因の一つであると考えられる。箕輪（2003）は、「全ての試合で、目標を明確にして全力を尽くすことが、その後のチームの強化につながる」と報告しており、そのことが再認識される結果となった。

Ⅳ．総合的考察

これまでに2006年度の西日本インカレにおける NK チームの敗戦について検討を行い、その要因として様々なことが考えられたが、この試合結果は必然のものであったと言わざるを得ない。

西日本インカレにおける NK チームは、大会に対する準備の中途半端さから自ら「不安」な要素を生んでしまい、優勝できるチャンスでありながら自分たちの力を全く発揮することなく、試合に負けてしまった。このことに関して、桜井（2009）は「私は、仕事でも人生でも＜負ける＞という行為の99パーセントは＜自滅＞だといっていいと思っている。実際に、スポーツ、経済、ギャンブル、あらゆる世界でくり広げられている勝負において、＜負け＞の原因をつぶさに見ていくと、圧倒的に多いのは自滅で負けを引き寄せているパターンである。」と述べている。NK チームの敗戦はまさに自滅という結果であったと言えよう。また、辻（2000）は、「スポーツには勝敗がつきものです。負けるという結果は稀な例を除いて、スポーツ選手が必ず経験しなければならないものです。その現実をどう捉えるかが、人として選手として成長していく上で大切なことは言うまでもありません。負けた経験をしたことからさらに強くなるようでなければならない。」と述べている。指導者及び選手は、今回の NK チームのような持てる力を発揮出来ずに負けた場合、そのことに対して正面から向き合い、その結果を無駄にせずに「必ず成長する」という姿勢を持つことが望まれ、それが最終的な勝者となるための条件であると考えられる。

さらに仰木（1997）は、「下した判断に対しては、成功、失敗にかかわらず、全責任を負うのは監督です。」としている。そして、松下（1989）は、「かりに部下に失敗があったとしても、その部下がはたしてその任にふさわしかったかどうか、またそれをさせるについて、十分な指導なり教育をしたかどうか、そういうことを指導者としてまず反省してみることが大事だと思う。もし部下に失敗があれば、部下を責める前にまず責任われにありきという意識を持つことが必要だと思う。」と述べている。西日本インカレにおける NK チームの敗戦の責任は、やはり M 監督の指導にあったと考えられ、試合に対して最善を尽くすと同時に、その結果に対する責任は自分が負うという姿勢が勝つためには必要であると言えよう。

最後に、井村（2009）は、「なぜ教育が楽しいかと言うと、１回１回が勝負だからです。」と述べている。そして、「でも難しいのは、選手にはその時しかないということです。」として、指導者自身の経験のために教え子を実験台にしたらダメだと指摘している。全ての指導者は、このことを肝に銘じて指導にあたるべきであり、敗戦という結果を真摯に受け止め、その原因となった課題の解決に全力で取り組み、同じ敗戦を繰り返さない努力が必要であろう。

Ⅴ．まとめ

2006年度の NK 大学女子バレーボールチームの西日本大学選手権大会における準決勝戦の敗戦の要因について、試合までのチームづくりの過程に関して検討を行った結果は、以下の通りである。

１）コート環境の変化がチームのパフォーマンスに影響するような状況では、重要な試合に勝つことは難しいことが明らかになった。
２）大事な試合で勝つためには、自信を持って試合に臨むことが必要であり、そのためには、準備段階でどのように練習に取り組できたかが重要であるということが明らかになった。
３）選手に、敗戦した試合のビデオを見せた上でレポートを書かせることは、選手自身を客観的に見つめ直させるいい機会となり、その後のチームづくりに重要な役割を果たすことがある。
４）トーナメント戦のような短期決戦の大会において、チーム状態が苦しい中で勝ち上がっていくためには、チームの雰囲気を変えることのできる選手の存在が必要である。
５）指導者が「チーム力を維持する」という考え方を持つことが、たとえ短期間であっても「チーム力の低下」につながることがある。従って、指導者はどんな状態であっても「常に進歩する」という姿勢を持つことが、チームが勝ち続けるためには必要である。

以上のような、一つの試合の敗戦に対する要因を解決していくことが、指導者、選手、そしてチームが成長するために重要であると考えられる。

引用・参考文献

江川玟成（1989）『実践スポーツ心理学』大日本図書，80頁.
井村雅代（2009）『あなたが変わるまで，わたしはあきらめない』光文社，60-64頁.
児玉光雄（2007）『名将・王貞治　－勝つための「リーダー思考」－』日本文芸社，39頁.
松下幸之助（1989）『指導者の条件　－人心の妙味に思う－』PHP 研究所，112-113頁.
箕輪憲吾（2003）『大学女子バレーボールチームに関する事例的研究　－ゲームにおける敗戦の内容について－』県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要　第４号，93-104頁.
森祇晶（1998）『人生最後に勝てる法則』新講社，24頁.
野村克也（2008）『野村の流儀　－人生の教えとなる275の言葉－』ぴあ株式会社，132頁.
仰木彬（1997）『勝てるには理由がある。』集英社，109頁.
桜井章一（2009）『負けない技術　－20年間無敗，伝説の雀鬼の「逆境突破力」－』講談社，38頁.
白石豊（2005）『心を鍛える言葉』日本放送出版協会，45頁.
辻秀一（2000）『スラムダンク勝利学』集英社インターナショナル，22，160頁.